

JAMA NEWS NO. 45

The Japanese Association of Management Accounting

日本管理会計学会 〒154-8515 東京都世田谷区世田谷4-28-1 国士舘大学経営学部 日本管理会計学会事務局

2017年度年次全国大会記

東京国際大学 奥 倫陽

統一論題「管理会計の拡張と実務適用の課題」

■■日本管理会計学会 2017 年度年次全国大会（大会実行委員長：田坂 公氏）が、福岡大学七隈キャンパスにおいて、平成 29 年 8 月 27 日（日）から 29 日（火）の 3 日間の日程で開催された。27 日（日）には、学会賞審査委員会、常務理事会、理事会および業務分担委員会別の懇談会が開催された。28 日（月）には、9:30 から 6 会場に別れて、計 20 の自由論題報告が行われた。午後からは、会員総会が行われた。

会員総会では、大会実行委員長あいさつ、会長あいさつ、議長選出、審議事項および報告事項が確認された後、学会賞審査報告および表彰式が行われた。表彰式では、大島正克氏（亜細亜大学）、白銀良三氏（国士舘大学）および吉岡正道氏（東京理科大学）の 3 氏が、学会賞（功績賞）を受賞された。山口直也氏（青山学院大学）（受賞業績：「メタ組織におけるマネジメント・コントロール-京都試作ネットの分析-」）が、学会賞（論文賞）を受賞された。福島一矩氏（中央大学）（受賞業績：「管理会計における急進的イノベーションの促進-管理会計能力に基づく考察-」）が、学会賞（奨励賞）を受賞された。その後、スタディ・グループ中間、最終報告および産学共同研究グループ最終報告、櫻井通晴氏による特別講演が行われ、スカイラウンジにて会員懇親会が開催された。

29 日（火）には、9:30 から 6 会場に別れて、計 20 の自由論題報告が行われ、13:00 から統一論題報告が行われた。大会期間中、211 名の参加者のもと、総じて盛会であった。

■■スタディ・グループ/産学共同研究グループ報告

会員総会に続き、大島正克氏（亜細亜大学）の司会で、スタディ・グループの中間報告および最終報告、産学共同研究グループの最終報告が行われた。

■スタディ・グループ中間報告（1）：研究代表 青木章通氏（専修大学）

「サービス業における顧客マネジメント」

青木章通氏（専修大学）により、サービス業における

顧客マネジメントにおいて、管理会計が果たすべき役割を再検討するという研究目的と研究概要について報告された。中間報告として、吉岡勉氏（東洋大学）により「管理会計パースペクティブに基づくサービスの再検討」として、サービスとサービス業の定義の再検討について、佐々木郁子氏（東北学院大学）により「スポーツビジネスにおけるレベニューマネジメントと顧客関係性-（株）楽天野球団の取り組みを通して-」として、サービス業の収益管理の新たな課題について、そして、谷守正行氏（専修大学）により「関係性に基づく顧客別原価計算」として、サービス業のコスト・マネジメントの新たな課題について、それぞれ報告された。

■スタディ・グループ中間報告（2）：研究代表者 宮地晃輔氏（長崎県立大学）

「中小企業における管理会計の実践レベルに関する事例研究-長崎県・熊本県での訪問調査を基礎として-」

宮地晃輔氏（長崎県立大学）により、中間報告として、中小企業における管理会計の実践レベルの把握を目的とした調査と当該調査結果から導出される意義について報告するという報告目的、先行研究および本研究との位置づけについて報告された。続いて、F 社の独自システムによる見える化の実現を中心とした同社管理会計システムの事例分析について報告された。吉川晃史氏（熊本学園大学）により、熊本県中小企業家同友会の会員企業における経営指針（経営理念・経営方針・経営計画）の計画に関する調査結果について、木村真実（熊本学園大学）により、沖縄県内自動車解体企業で行われているマテリアルフローコスト会計の事例分析について、それぞれ報告された。

■スタディ・グループ最終報告：研究代表者 安酸建二氏（近畿大学）、新井康平氏（群馬大学）

「販売費及び一般管理費の理論と実証」

新井康平氏（群馬大学）によりコスト変動の把握と変動の原因解明に向けた実証的研究について報告された。最終報告として、第 1 に、理論的基礎である資源消費モ

デルの概要を明らかにするという研究目的について報告された。第2に、研究開発費の費用収益対応度と変動要因について、費用収益対応度を時系列に確認し、研究開発費の時系列的な特徴を明らかにし、コスト変動モデルへの適合度を確認することにより、研究開発費のコスト変動特性を考察された。最後に、変動費化の程度の変動要因について、平均的には、企業は自社の売上高の変動状況を踏まえて固定費/変動費の割合を決定している証拠を得たことを報告された。

■産学共同研究グループ最終報告：研究代表 清水信匡氏（早稲田大学）

「KPI と予算の設定及び業績予測に関する産学共同研究」清水信匡氏（早稲田大学）により、冒頭、最終報告として、研究概要について報告された。分析枠組みとして、マイルズ&スノー理論を用いた戦略特性の測定方法について説明された。続いて、矢内一利氏（青山学院大学）より、質問票調査の概要と分析結果について報告された。受身型の特性が強まると、会計的裁量行動による利益増加型の報告利益管理と、売上高操作による利益増加型の報告利益管理を行う傾向が強まることが報告された。最後に、清水信匡氏（早稲田大学）により ROE を重視する傾向と、裁量の費用の調整による報告利益管理額との間に有意な正の相関が見出されたことが報告された。

■特別講演 櫻井通晴氏（専修大学名誉教授）

「契約価格、原価、利益の研究-研究アプローチの変遷と防衛省の「訓令」の批判的検討-」

辻 正雄氏（名古屋商科大学）の司会で、櫻井通晴氏（専修大学）による特別講演が行われた。冒頭、防衛省におけるパフォーマンス基準の導入を提案することであるという本講演の目的を述べられた。続いて、本研究に至ったこれまでの研究アプローチについて説明された。また、「訓令」の課題として、調達契約での利益、加工費率での製造間接費の配賦、利子の非原価性という3つの課題を指摘された。最後に、それらの問題点を改善する方向性として、パフォーマンス基準に基づく契約制度について提案された。質疑応答も含め、終始、活発な講演会であった。

■統一論題報告・討論

伊藤和憲氏（専修大学）を座長とする統一論題報告が行われた。テーマは、「管理会計の拡張と実務適用の課題」であった。冒頭、座長による開題が行われ、統一論題である管理会計の拡張と実務適用の課題の概要について報告された。続いて、関連する4つの報告が行われた。

■統一論題報告（1）：伊藤武志氏（株式会社価値共創、専修大学大学院）

「社会に貢献する企業の経営管理-オムロンの事例研究を中心として-」

本報告では、「企業はどのように社会に貢献する存在なのか」という現代的な問いに対して、経営管理、管理会計の立場から切り込むために、立石一真が創業して以来90年間、社会貢献に基づき経営されてきたオムロン社の事例を考察された。同社では、ベンチャー精神を醸成するために、小規模組織制や小規模事業部制がとられてきており、ベンチャー精神こそが、日本企業おかれた状況を打開する要素であると述べられてきた。カンパニー制、事業部、そしてオムロンのような小事業部がそれぞれESG情報を含む長期的なステークホルダー志向を持つことで、意欲やベンチャー精神につなげるという提言を報告された。

■統一論題報告（2）：伊藤克容氏（成蹊大学）

「マーケティング管理会計の展開：顧客動向の追跡と動線設計」

本報告では、顧客に対する影響活動の影響として、多くの企業で導入されているマーケティングオートメーション(Marketing Automaton: MA)に着目し、伝統的なマーケティング領域での管理会計との間で比較検討され、マネジメントコントロールの発展という観点からMAにおける顧客への影響活動について考察された。現在では、個別顧客の動向の追跡、個別対応を系統的に実施することが技術的に可能となっており、どのような「動線」を設計し、実現するかに関心が集まっており、管理会計において、顧客行動に対する影響活動が重要になっていることを報告された。

■統一論題報告（3）：内山哲彦氏（千葉大学）

「管理会計研究・実践と人的要素の管理-統合報告を中心として-」

本報告では、企業価値創造における経済価値と社会価値・組織価値がともに求められる経済基盤への変化を前提に、人的要素の管理に焦点をあて、管理会計研究・実践のかかわりについて検討された。その際、統合報告の考え方や実践が与える影響に着目して報告された。「先義後利」型経済において、管理上必要となるのは、(超)長期視点(持続可能性)、統合的(複合的)企業価値観および企業価値創造の要素の統合的(複合的)管理が管理上必要となり、その解決の1つのツールとして、統合報告があることを報告された。

■統一論題報告（4）：篠田朝也氏（北海道大学）

「資本予算実務の課題」

本報告では、資本予算領域に関連する実務の拡張とその課題についての論点を報告された。論点として、投資経済計算における評価技法の変化、評価技法の多様性、経過観察と事後監査の体制構築、定性的リスク項目を含むリスクマネジメント、撤退基準の設定、経済的効果の把握が困難な案件への対応および収益管理の問題について説明された。また、資本予算/意思決定会計のデータは”confidential matter”であるといった研究上の制約を指摘され、その制約を克服する提案について報告された。

■統一論題討論

統一論題報告の後、続けて統一論題討論が行われた。伊藤和憲座長から、どのような点が拡張されたのか、実務適用における課題とは何かをそれぞれ報告者に対して質問された。また、小倉昇氏（青山学院大学）、水野一郎氏（関西大学）、浜田和樹氏（関西学院大学）、櫻井通晴氏（専修大学）、大下丈平氏（九州大学）からの質問があり、活発な討論が行われた。

学会賞決定！

特別賞、功績賞の審査委員会の審議の結果を受けて、2017年7月15日（土）の第2回常務理事会において、功績賞3名が決定しました。2017年度会員総会の中で受賞式が行なわれ、水野一郎会長より賞状および副賞が授与されました。おめでとうございます。

《特別賞》

該当者なし

《功績賞》

大島正克氏（亜細亜大学）
白銀良三氏（国士舘大学）
吉岡正道氏（東京理科大学）

論文賞、文献賞および奨励賞の審査委員会の審議の結果を受けて、2017年8月27日（土）開催の第3回常務理事会において、本年度の論文賞および奨励賞が次の2氏に決まりました。2017年度会員総会の中で受賞式が行なわれ、水野一郎会長より賞状と副賞が授与されました。おめでとうございます。

《論文賞》

山口直也氏(青山学院大学)
『メタ組織におけるマネジメント・コントロール—京都試作ネットの分析—』

《文献賞》

該当者なし

《奨励賞》

福島一矩氏(中央大学)
『管理会計における急進的イノベーションの促進—管理会計能力に基づく考察—』

2018年度年次全国大会 慶應義塾大学に決まる！

2018年度年次全国大会が次のとおり決定いたしましたのでお知らせいたします。なお、詳細については追ってお知らせいたします。

- 日程：8月27日(月)～8月29日(水)
- 場所：慶應義塾大学三田キャンパス（〒108-8345 東京都港区三田2丁目15-45）
- 大会準備委員長：園田智昭氏

2018年度年次全国大会 開催ご挨拶

大会実行委員長

慶應義塾大学 園田智昭

2018年度日本管理会計学会全国大会を慶應義塾大学三田キャンパスで、8月27日から29日にかけて開催させて頂くことになりました。8月27日(月)は常務理事会と理事会、28日(火)と29日(水)は自由論題報告と統一論題の報告・討論です。三田キャンパスの最寄り駅は、JR田町駅、都営三田線三田駅、都営大江戸線赤羽橋駅ですので、ご参加を予定されている方は、早めのホテルの予約をお願いいたします。

3月から4月にかけて自由論題の報告を募集しますので、積極的なご応募をお待ちしています。自由論題のご報告者には、フルペーパーの提出を8月上旬までをお願いする予定です。なお、統一論題は「企業グループの管理会計」をテーマに行います。

全国大会の実行委員会のメンバー一同、参加した先生方が有意義な時を過ごせるように、誠心誠意準備に勤めさせていただきます。多くの先生方のご出席をお待ちしています。

2018年度第1回国際学会参加費の助成について（公募）

会員の国際的活動を支援する一環として、標記の件について、下記の要領で公募いたします。

■ 助成対象

管理会計に関連する海外の学会等（2018年4月1日から2018年9月30日に開催される学会等）において、研究発表をする場合または当該学会と本学会との交流を促進するため活動を行う場合。

■ 助成額

航空運賃（往復）が5万円未満の場合には全額を、航空運賃（往復）が5万円を超過する場合には、5万円にその超過額の1/2を加算した額を助成する。ただし1件あたり10万円を限度とし、予算総額は年間20万円とする。

■ 応募方法

国際会議参加旅費助成規程（<http://www.sitejama.org/regulation/08.html>）を参照し、別紙書式に必要事項を記入のうえ、学会開催要項等を添付し、学会事務局に送付すること。

<学会事務局>

〒154-8515 東京都世田谷区世田谷4-28-1
 国土館大学経営学部 井岡大度研究室内
 日本管理会計学会事務局
 e-mail: jama-info@sitejama.org

■ 応募締切

2018年3月31日《期日厳守》

■ 選考方法

選考委員会で選考し、常務理事会（2018年4月開催予定）で決定。採否については、本人宛に通知します。なお、2018年度の2回目の公募は、2018年5月に募集予定です。

※対象＝2018年10月1日～2019年3月31日に開催される国際学会・国際会議等

学会業務日誌

2017年7月15日(土)

▼第2回常務理事会開催(大阪大学豊中キャンパス)

- ◆ 2016年度収支決算(案)及び監査報告が承認されました。
- ◆ 2017年度収支予算(案)が承認されました。
- ◆ 学会賞(特別賞・功績賞)(案)が承認されました。(詳細につきましては、<学会賞決定>をご覧ください。)
- ◆ 産学共同研究グループについて、研究代表者を浅田孝幸氏、副代表を青木雅明氏として、「グローバル管理会計基準の可能性と展望に関する研究」(仮称)というテーマで実施されることが承認されました。
- ◆ 業務分担の一部変更と参事の退任が承認されました。
- ◆ 新入会員19名(正会員10名・準会員8名・賛助会員1社)、退会者4名(正会員3名・準会員1名)が、また、準会員から正会員への会員種別変更2名が承認されました。
- ◆ 学会誌編集委員会運営規程の改訂(案)が承認されました。
- ◆ 「会則」の賛助会員規程の改訂(案)が承認されました。
- ◆ 2017年7月15日現在、正会員は630名、準会員は81名、特別会員は4名、賛助会員は9社、合計会員数は724会員であることが報告されました。
- ◆ 2017年度次全国大会の準備状況について報告されました。
- ◆ 2018年度次全国大会の開催について、園田大会準備委員長より報告されました。
- ◆ 地方部会の活動状況について報告されました。

2017年8月27日(土)

▼第3回常務理事会開催(福岡大学七隈キャンパス)

▼第2回理事会開催(福岡大学七隈キャンパス)

- ◆ 学会賞の受賞者(論文賞・文献賞・奨励賞)(案)が承認されました。(詳細につきましては、<学会賞決

定>をご覧ください。)

- ◆ 2016年度収支決算書(案)および監査報告が承認されました。
- ◆ 2017年度事業計画(案)が承認されました。
- ◆ 特別会員の推薦が承認されました。
- ◆ 産学共同研究グループ(研究代表者:浅田孝幸氏、「グローバル管理会計基準の可能性と展望に関する研究」)が承認されました。
- ◆ スタディ・グループ(研究代表者:伊藤和憲氏、「医療機関におけるマネジメント・システムの導入とその成果に関する研究」)が承認されました。
- ◆ 特別会員1名の推薦が承認されました。
- ◆ 2017年8月27日現在、正会員は637名、準会員は74名、特別会員は4名、賛助会員は9社、合計会員数は724会員であることが報告されました。
- ◆ 2017年度次全国大会の準備状況について報告されました。
- ◆ 2018年度次全国大会の開催について報告されました。

2017年11月25日(土)

▼第4回常務理事会開催(富山大学五福キャンパス)

- ◆ 2017年度会員総会議事録(案)が承認されました。
- ◆ 2018年度第1回国際会議参加旅費の助成についての公募(案)が承認されました。
- ◆ スタディ・グループ及び産学共同研究の会計報告が承認されました。
- ◆ 2017年11月25日現在、正会員は643名、準会員は73名、特別会員は4名、賛助会員は9社、合計会員数は729会員であることが報告されました。
- ◆ 2018年度次全国大会の開催について報告されました。

会員数の推移

- 第2回常務理事会(2017.7.15):新入会員18名(正会員10名・準会員8名・賛助会員1社)、退会4名(正会員3名・準会員1名)、会員種別変更(準会員から正会員2名)、会員現員数は724会員(正会員630名、準会員81名、賛助会員9社、特別会員4名)
- 第3回常務理事会(2017.8.27):新入会員3名(正会員2名・準会員1名)、退会3名(正会員1名・準会員1名・特別会員1名)、会員種別変更(準会員から正会員7名、正会員から特別会員1名)、会員現員数は724会員(正会員637名、準会員74名、賛助会員9社、特別会員4名)
- 第4回常務理事会(2017.11.25):新入会員5名(正会員4名・準会員1名)、退会0名、会員種別変更(準会員から正会員2名、正会員から準会員1名)、会員現員数は729会員(正会員643名、準会員73名、賛助会員9社、特別会員4名)

日本管理会計学会歴代会長の回想録（第2回）

管理会計と共に半世紀

早稲田大学名誉教授 西澤 脩

1. 幸運に恵まれて会計の世界へ

私と会計との関わり合いは、第二次世界大戦後、アメリカの会計学がわが国に導入された時期とほぼ同時期にはじまった。わが国では、1947年、アメリカの1933年証券法および1934年証券取引法を参考にして、『証券取引法』が制定された。さらに、同法に基づいて公認会計士による法定監査を実施するため、公認会計士試験が開始されたのが1950年のことである。

その前年に早稲田大学に入学した私は、会計学の授業で名物教授の佐藤孝一先生から、「米国ではCPACは外交官や弁護士と並ぶ高官で、わが国でもその前途はバラ色だ！」と檄を飛ばされる。“この一言”に感銘し、会計士試験に挑戦することを決意した。当時は、受験雑誌も予備校も一切なく、さらに学生での受験は白眼視されており、独学で受験に挑戦した。幸いに、第一次に続いて最難関の第二次試験に合格したのは、学部4年生の夏のことだった。

その合格が影響をしたのか、卒業を目前に控え、指導教授の青木茂男先生から、「ぜひ大学に残るよう」に助言を頂いた。この二度目の“この一言”で、会計士から学究へ転向し、開設直後の大学院商学研究科に進むことになった。大学院では、修士課程から博士課程に進学するとともに、同時に、会計士として第三次試験に合格して公認会計士となった。“二度あることは三度ある”ようで、翌年の春には早稲田大学の助手試験にもパスし、大学教員の端くれとなる。かくして弱冠25歳で、院生と教員と会計士の三足の草鞋を履いて、会計の道に走り出した。

“もはや戦後ではない”と『経済白書』が報じた1956年には、米國務省が、日本復興の一助として早大とミシガン大学との教授交換協定を立ち上げた。当初は教授だけに限られていたが、協定最後の年には、特例として助手の私も派遣される。50年代末は渡航も外貨も貿易も未だ自由化されておらず鎖国の状態で、郷里の埼玉新聞には「西澤助手渡米」とのニュースが報道される程であった。

渡米先のミシガン大学は会計面でも米国屈指の州立大学で、会計図書も完備していた。しかし、未だコピー機が無い時代なので、必要な資料は手書きして持ち帰る以外に道はない。そこで、図書館に終日楯籠り写経ならぬ文献の書き写しに専念することを決意した。その甲斐あって1年後帰国するまでに書き取った大学ノートは数冊に達し、私の玉手箱となる。キャンパス外では、管理会計の研究団体である米国会計人協会(NAA—現在のIMA)で初の日本会員となり、そのお蔭で、会員である世界的企業で管理会計実務の現場に接することができ、文字どおり貴重な体験が味わえた。加えて同協会が出版する刊行物の翻訳権も頂き、自称NAA学派と呼ぶ程の学恩を受け、日本への橋渡し役を勤める。

ミシガンでの研究成果は、やがて“会計三賞”の受賞として具現する。帰国後3年目の1962年に、処女作の『営業費管理会計』（ダイヤモンド社刊）が、日本経営協会の“経営文献賞”を頂く。「ぜひ次は弊社に」と祝賀の席で懇請され、僅か1年で白桃書房から次作の『研究開発費会計』を書き上げる。本書が“日経・経済図書文化賞”に輝き、日本経済新聞の第1面を飾るとは夢想もしていなかった。

爾後4年を経た1967年には、日本会計研究学会から“学会賞”が授与される。その前年に発表した「貢献差益法による長期利益目標の設定」と題する論文が対象とされた。長期利益計画の設定を提唱しその中に貢献差益法という新手法を導入したものである。恩師の青木先生は既に会計三賞に輝いておられたが、続いて弟子の私も同じ三賞に浴し、学恩に酬いることができた。齢37歳の時である。

2. 専念した学際的管理会計研究

早稲田大学で教授に昇格してから2年目の1968年(38歳)に、新制の商学博士を賜る。旧制の博士号は功遂げ名を遂げてから晩年に頂くものと相場は決まっていた。しかし、新制度に移行してからは、特定の研究業績に基づいて授与されるよう改められる。このため、“会計三賞”を既に受賞していた私は、論文『研究開発費管理の研究』で第1号の新制博士となる。

45年間に及ぶ教職時代は、専ら学際的管理会計の研究に始終した。ここに“学際的管理会計”とは、管理会計を中核とし、これと隣接諸学を複合した研究領域を指す。このような学際的研究が台頭したのは1970年代で、宇宙船の月面着陸を成功させたアポロ計画がもたらしたシステム・アプローチの成果である。この学際的研究を会計面から展開したのが学際的管理会計であり、これを全十巻の全集にまとめたのが、『原価の会計と管理シリーズ』(白桃書房他刊)である。しかし、当初からその呼称で着々と執筆した訳では無く、あれこれ苦心の末14年もの歳月を要して完成したのが当シリーズである。

- ① 1980年刊：研究開発費の会計と管理
- ② 1982年刊：営業費の会計と管理
- ③ 1984年刊：輸送費の会計と管理
- ④ 1985年刊：広告費の会計と管理
- ⑤ 1988年刊：原価低減の会計と管理
- ⑥ 1987年刊：保管費の会計と管理
- ⑦ 1988年刊：物流費の会計と管理
- ⑧ 1989年刊：本社費・金利の会計と管理
- ⑨ 1990年刊：人件費の会計と管理
- ⑩ 1994年刊：情報処理費の会計と管理

その端緒となったのが、『研究開発費の会計と管理』及び『広告費の会計と管理』である。前著で日本経営協会から“経営科学文献賞”を頂き、次著で日本広告学会から“日本広告学会賞”に輝く。この受賞を契機とし、「原価の会計と管理」と銘打った類書を順不同に刊行して行った。還暦を迎えた1990年には、早稲田大学の商学部長に再選され公私とも多忙だったが、その祝賀を記念して再編集したのが“原価の会計と管理シリーズ”である。

因みに当シリーズを体系化してみると、全体の総論をなすのが『原価低減の会計と管理』である。そのうち西澤管理会計の核心をなす営業費会計(Accounting for Marketing Cost)を俯瞰したのが、『営業費の会計と管理』である。更に物流会計を3部作にまとめたのが、著書の『物流費の会計と管理』とその基盤をなす訳書(NAA)の『輸送費の会計と管理』及び『保管費の会計と管理』である。次いで、これまで未開拓だった新テーマに挑み、『本社費・金利の会計と管理』及び『人件費の会計と管理』を書き上げる。1994年には『情報処理費の会計と管理』を上梓し、当シリーズは無事完結する。これらの学際的管理会計を現役最後に総括したのは、2001年に早稲田大学で行われた最終講義“私の学際的管理会計研究”である。

そのうち特記すべきは、物流費会計の開発である。“運び屋”や“倉庫番”に過ぎなかった輸送・保管を、今のロジスティクスにまで近代化し物流時代を構築することができた。その狼煙を上げたのは、1970年に光文社から出版した『流通費』である。その後、旧通産省や旧運輸省の強い行政指導もあり、昨今のロジ時代を開幕することが出来た。この物流を会計面から論究したのが物流費会計で、2003年の『物流活動の会計と管理』(白桃書房刊)まで19冊の著書・訳書を著すことができた。

3. 悔いなき、わが管理会計人生

満70歳で早稲田大学を定年退職し名誉教授となった後は、日本学術会議の職務に専念する。“学者の国会”とも愛称される日本学術会議は、総理大臣から任命された210名の会員が政策提言を行う内閣府の機関であ

る。定年直前の 2000 年にその会員に推薦されたが、1 年生で途端に第 3 部（人文科学）の副部長に選出され戸惑ってしまう。幸い関係者の支援で無事職務が遂行でき、後日は部長職も拝命し、6 間年の任期を全うすることが出来た。

他方学界では 2006 年に、新設された LEC（東京リーガルマインド大学）の会計大学院に専任教授として招聘される。当大学院は、いわゆるアカウンティング・スクールで、社会人を対象とした会計大学院の修士課程である。お蔭で 6 年もの間現役の学究生活ができ、依然として研究と著作が続行出来たのは幸いだった。著作面では、既に還暦を挟んで“原価の会計と管理シリーズ”全十巻を完成したので、今度は古稀記念の“ニュー管理会計シリーズ”に着手する。

- ① 2003 年刊：IT 時代の会計と管理
- ② 2003 年刊：研究開発の会計と管理
- ③ 2003 年刊：物流活動の会計と管理
- ④ 2004 年刊：企業集団の会計と管理
- ⑤ 2004 年刊：企業再編の会計と管理
- ⑥ 2005 年刊：企業価値の会計と管理
- ⑦ 2007 年刊：時価評価の会計と管理
- ⑧ 2010 年刊：環境保全の会計と管理

総論の『IT 時代の会計と管理』を皮切りに、『研究開発の会計と管理』及び『物流活動の会計と管理』に次いで、『企業集団の会計と管理』・『企業再編の会計と管理』及び『企業価値の会計と管理』（白桃書房刊）を刊行し、続いて、『時価評価の会計と管理』及び『環境保全の会計と管理』（東京リーガルマインド刊）を刊行した。

かくして 1962 年の処女作『営業費管理会計』以来数えてみると、単著だけでも著書・訳書合わせて 119 冊（学位論文のほか 7 冊の受賞図書を含む）に達した。

また、多くの褒章を得る機会も頂いた。早大アジア太平洋研究センターの所長に就任直後の 1997 年（67 歳）に、大学本部と経て紫綬褒章受賞の内示を受ける。紫綬褒章など夢想もしていなかったもので、他人の間違いでないかと疑った程である。4 月 29 日“昭和の日”に正式発令され、後日皇居「春秋の間」で拝謁を賜る。生まれて初めての皇居参内であり、家内ともども陛下からお言葉を頂いた時は、身が震える思いだった。参考までに歴代の受賞者を賞勲局からお聞きすると、会計学ではもちろん商学・経営学でさえ紫綬褒章は初の受章とのことである。授章理由は「会計学研究功績（早大教授）」とあるので、早大教授として学際的管理会計の開発に努めた功績によるものと推測される。

それから 7 年後の 2004 年秋の叙勲では、74 歳にして瑞宝中綬章を授与される。11 月 3 日“文化の日”に正式発令され、拝謁の光栄に浴する。再度の皇居参内であり、心の準備も出来ていたが、陛下からお言葉を頂いた時は、学者になった喜びにひたることができた。更に 2003 年 1 月 10 日には、皇居「正殿の間」で“講書始の儀”に学術会議の役員として参列し陪聴する。講書始は、巷間“ご進講”とも称され皇室の新年三大行事の一つとされている。両陛下を初め全皇族も出席され、1 時間に亘り最高権威 3 人からご進講を受けられた。

以上、米寿をもうすぐ迎える我が人生を回顧し、悔いなき管理会計人生だったと言える。

事務局からのお知らせ

- 学会事務局が以下の通り国士舘大学に移転したのでお知らせいたします。なお、メールアドレスに変更はありません。
- フォーラムやリサーチセミナーの案内等、会員宛の連絡にEメールを活用したいと考えています。メールアドレスを未登録の方は、学会事務局までご連絡ください。また、すでに登録されている方で、案内等が届かない、あるいは、メールアドレスに変更があった場合には、速やかに学会事務局までご連絡ください。

日本管理会計学会広報 責任者 : 井岡大度

メンバー : 片岡洋人, 後藤晃範, 奥 倫陽

発行機関 : 日本管理会計学会

《本部事務局》 〒154-8515 東京都世田谷区世田谷4-28-1

国士舘大学経営学部 井岡大度研究室内 日本管理会計学会事務局

E-mail : jama-info@sitejama.org

ホームページ | 【URL】 <http://www.sitejama.org/>